

平成30年度日本語指導が必要な児童生徒支援研修会 藤枝市・吉田町

検証実施機関（団体）：静岡県教育委員会 藤枝市教育委員会 吉田町教育委員会
静岡県教育委員会 静西教育事務所 南里 哉子

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input type="checkbox"/> 養成 <input checked="" type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input checked="" type="checkbox"/> 基礎教育 <input checked="" type="checkbox"/> 専門教育 <input checked="" type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年 7月2日（火）
総時間数	130分
研修・授業科目名	平成30年度日本語指導が必要な児童生徒等支援研修会 藤枝市・吉田町
受講者	人数：24名 担当教員19名（内2名加配）・藤枝市支援員3名 市教委担当者2名

2 地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

（1）当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

○藤枝市：

平成29年度まで外国人児童生徒が増加傾向にあったが、平成30年度ではやや減少した。しかし帰国子女が増加したため、平成30年度には日本語支援が必要な児童生徒の合計数はこの数年でいちばんの数となっている。

国別ではフィリピン・ペルー・ブラジル・中国の児童生徒が多く、平成30年度に在籍している児童生徒ではブラジル人児童生徒が最も多い。しかし日本語支援が必要な児童生徒となると、ペルー人児童生徒が最も多くなっている。

藤枝市では外国人児童生徒の散在化・多国籍化が進んでおり、日本語支援が必要な児童生徒のうち、約35%が上記国以外の児童生徒である。

○吉田町：

小学校では外国人児童生徒数及び要日本語支援の児童数が増加傾向にあり、特に要日本語指導の児童数はこの数年で2倍になっている。中学校では外国人生徒数は減少しており、要日本語指導生徒数も減少している。

国別ではフィリピンの児童生徒が最も多く、次いでブラジル・ペルー・中国の児童生徒が多い。

（2）当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制

○藤枝市：

加配教員が配置された学校は小学校1校のみ。平成30年度現在、市では外国人適応指導員を3名雇用し、指導員は複数の学校を巡回して（1日4時間）個々の困り感に応じた指導を行っている。日本語が全く話せない児童生徒については、学校へスムーズに適應できるよう、週に2～3回の指導を行っている。平成30年度は対象児の多い小・中それぞれ一校ずつに週4日訪問指導を行った。

○吉田町

近年は児童生徒の出入りが激しく、平成27年度までは中学校にも加配教員が配置されていたが、平成30年度加配教員が配置された学校は小学校1校のみ（吉田町管内の小中学校全数は、小学校3校・中学校1校）。

平成30年度は非常勤講師が小学校1校中学校1校に配置され、取り出し授業を行っている。また、外国人児童生徒相談員としてフィリピン語と日本語が話せる人材を雇用しており、各校の要請により週に6時間派遣している。

（3）外国人児童生徒等教育に関わる教員（一般教員を含む）、支援員の教育力の課題

- ・支援員に支援内容任せお任せしてしまっている教員が少なくない。
- ・教員に危機感がなく、取り出し指導の必要性について理解していない場合がある。
- ・人員不足から取り出し指導ができる教員がおらず、支援員が対応しても指導が必要な児童生徒すべてに支援が行き届かない。

3 研修・授業の成果について

（1）（受講者アンケートより）

①受講者の研修への期待

- ・外国人の日本語指導を市の適応指導員にお願いしているため、自分がどのようにフォローしていけばいいか知りたい。
- ・特別な教育課程とは。
- ・取り出し授業のやり方
- ・日本語の指導力をつけたい。
- ・保護者との連絡の取り方

②受講者の研修内容の理解度・満足度

期待と内容が

- | | |
|---------------|-----|
| ・ほぼ一致 | 14% |
| ・だいたい一致 | 86% |
| ・あまり一致していなかった | 0% |
| ・全く違っていた | 0% |

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動

- ・講師の講話
- ・事例についての話し合い
- ・他校の様子を伺ったこと（グループワーク）

④受講者が今後望む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

○研修内容

- ・いろいろな対応例
- ・取り出しでの具体的な指導方法
- ・必要性の持たせ方、意欲の持続のさせ方の具体例
- ・進路指導
- ・支援計画を立てる上での実践研修

- ・保護者対応
- ・多忙の中でも実践できる方法
- ・JSL を具体的に扱っている学校の事例
- ・実際の指導参観
- ・特別の教育課程について
- ・中学生への支援

○研修のタイプ

- ・事例を聞く
- ・講義形式
- ・設定したテーマに関する話し合い

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題

受講者の期待と研修内容はだいたい一致しており、受講者からも同じ回答がもられたのは大変よかった。

特別の教育課程について基本的なことをお話ししてもらうことは、受講者にとっては簡単すぎるかもしれないと危惧していたが、勉強になったと感じた受講者が多く、衝撃を受けた。取り出し授業を実際に見たことがなく、日本語支援について想像がつかない教員が多いように感じられたため、今後は特別の教育課程編成の必要性を知ってもらうと同時に、実際の現場を見たり事例を聞いたりすることが大事だと感じる。

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

内容が基礎・専門・支援員向けにそれぞれ書かれており、大変わかりやすいが、様々な立場の方が参加される研修においては、「<支援員>と書いていないから取り扱ってはいけないだろうか」と悩んでしまう項目もある。よって、項目によってはカテゴライズされていない方がいい場合がある。

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

内容によってどのような活動をしたらいいか考える上では非常に参考になった。講師やファシリテーターとして研修を進める身であれば、更に多くの活動が出てくるはずなので、例えばウェブ上で実際に行った活動について簡単な実践報告ができるような場があればより良い研修が作れるのでは。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

現場の声をそのまま研修に活かせる立場であれば、ガイドブックのような存在になってくれると思う。現場と講師の仲介役だと、どちらかがモデルプログラムを知らなければ逆にやりにくくなる（こちらがモデルプログラムの内容を想定していても、講師側がそれを知らなければ意思の疎通が難しくなるため）。

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

日本語支援に関する様々な知識を吸収し、実践に活かす力。

講義を聞くだけでなく、グループワークなど個別に考える活動も必要になるため、研修を組み立てる際にモデルプログラム内の活動を参考にすると良いのでは。